

# 〈新刊〉

【経済史、アジア史】



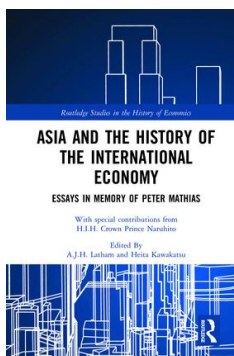
経済史分野で著名な P.マサイアス教授の追悼論集が刊行

KS-4395 / July 2018

好評発売中!!

## A.J.H.レイサム、川勝平太編 アジアと国際経済史 —P.マサイアス追悼論集—

Latham, A. J. H. / Kawakatsu, Heita (eds.), Asia and the History of the International Economy: Essays in Memory of Peter Mathias. With special contributions from H. I. H. Crown Prince Naruhito. (Routledge Studies in the History of Economics 203) 208 pp. 2018 (Routledge, UK) <643-776>  
ISBN 978-1-138-29860-6 ★hard



本書は2016年3月に亡くなったP.マサイアス教授を追悼する記念論文集です。マサイアス教授は1968年から87年までオックスフォード大学、1987年から95年までケンブリッジ大学で指導にあられた、大変著名な経済史研究者です。日本人研究者との交流も多く、本書の寄稿者には教え子であった皇太子徳仁殿下や川勝平太（現静岡県知事）をはじめとし、A.J.H.レイサム、北川勝彦（関西大学名誉教授）といった著名な研究者が名前を連ねています。

本書を経済史、アジア史、グローバル・ヒストリーに関心をもつ研究者・研究室にお薦めいたします。

### 🌸🌸🌸<Table of Contents>🌸🌸🌸

Introduction (A.J.H. Latham)

#### PART I

1. An Interview with Peter Mathias (A.J.H. Latham)

#### PART II

2. Barges and Bargemasters on the Thames in the Eighteenth Century (H.I.H. Crown Prince Naruhito)
3. Edo and Water (H.I.H. Crown Prince Naruhito)
4. Consuming Plants: Botany and Consumer Society (Toshio Kusamitsu)
5. Invisible Links: Maritime Trade between Japan and South Asia in the Early Modern Period (Ryuto Shimada)
6. Knowledge and Use of Japanese by the Dutch on Dejima Island, Nagasaki (L.M. Cullen)
7. India's Role in the Industrial Revolution (Heita Kawakatsu)
8. India and the Emergence of the International Economy: A Synopsis (A.J.H. Latham)
9. Steamship Competition in Asia in the Late Nineteenth Century: Britain and the United States (Masami Kita)
10. Reorganization of the Mixed Court System in Shanghai, 1906-1913 (Eiichi Motono)
11. The Dispute over the Quality of Rice Exports from Siam to Europe in the 1920s (Toshiyuki Miyata)
12. Japan's Economic Diplomacy in Colonial Africa during the Inter-war Period: Japanese Consular Reports (Katsuhiko Kitagawa)

(次ページ以降もご覧下さい。)



## 序文

(※本書 Preface の日本語訳)

共編者 川勝平太

本書は、ピーター・マサイアス教授に捧げられた追悼論文集です。マサイアス教授は、1928年にお生まれになり、2016年に亡くなりました。マサイアス教授は、1969年から1987年までオックスフォード大学オールソウルズ・カレッジで教鞭をとられ、経済史教授 (Chichele Professor of Economic History) となりました。また、1987年から1995年はケンブリッジ大学に移られ、同大学ダウニング・カレッジ学寮長 (Master of Downing College) を務められました。また、マサイアス教授は、大英帝国第三等勲章 (CBE: Command of the British Empire) を授与され、英国王立学士院会員と英国王立歴史学者協会会員を務められました。

マサイアス教授は、日本の経済史研究者の間で広く知られた存在でした。といいますのも、小松芳喬・早稲田大学教授が、マサイアス教授の著名な教科書 *The First Industrial Nation* (1969年) を1972年に『最初の工業国家』として日本語に訳され、さらに、原著1983年版を1988年に日本語に翻訳されたからです。

小松教授は、著名な学術雑誌 *Economic History Review* に ‘*The Study of Economic History in Japan*’ (「日本における経済史研究」) を執筆するよう要請されるほど、英国の経済史研究者と広く交流を持たれました。中でも、小松教授は、マイケル・ポスタン教授及びジョン・ハバクック教授と強い友情を育まれていました。小松教授の60歳の誕生日をお祝いして日本で1968年出版された論集『近代化と工業化』 (*Modernization and Industrialization*) には、マイケル・ポスタン教授が、「中世農村における法的地位と経済条件」 (*Legal Status and Economic Condition in Medieval Villages*)、また、ジョン・ハバクック教授が、「19世紀における経済発展と英国政治」 (*Economic Development and English Politics in the Nineteenth Century*) という論稿をお寄せになったほどです。やがて、ポスタン教授のご紹介で、小松教授はマサイアス教授と交流を持たれるようになりました。1978年夏、エジンバラで開催された第7回国際経済史学会に、国際的に有名な多くの経済史研究者が集いましたが、マサイアス教授は、イギリスの代表として、また、この国際学会の代表を務められ、小松教授は、日本側を代表されました。

早稲田大学の学生時代、私は、大変幸運なことに、小松教授のご指導を身近で受けることができました。小松教授は、私の研究を大変親身にご支援くださり、私に多くの挑戦する機会を設けてくださいました。私が、海外留学のための経団連「国際文化教育交流財団」奨学生に選抜された際、小松教授は、オックスフォード大学への留学を薦めてくださり、1977年から1981年の4年間、オックスフォード大学ウォルフソン・カレッジに学ぶことになりました。その際、マサイアス教授にご指導を仰ぐことになりました。1984年には、オックスフォード大学に博士論文 ‘*International Competition in Cotton Goods in the late Nineteenth Century with Special Reference to Far Eastern Markets*’ (「19世紀後半





の綿織物に見る国際競争：極東市場の事例を中心に」)を提出することができました。また、マサイアス教授の70歳を記念した論文集中に、『The Lancashire Cotton Industry and Its Rivals』（「ランカッシャー綿工業とその競争相手」）を寄稿できたことは、私の人生最高の名誉の一つだと思っております。

私は、マサイアス教授のご指導を受けた最初の日本人学生です。その後、1983年から1985年には、オックスフォード大学マートン・カレッジで学ばれた皇太子殿下がマサイアス教授のご指導の下、研究を進められました。1989年、皇太子殿下は『The Thames as Highway: A Study of Navigation and Traffic on the Upper Thames in the Eighteenth Century』（「幹線輸送路としてのテムズ川：18世紀テムズ川上流における航行と交通に関する研究」）という労作を完成されました。マサイアス教授は生涯多くの大学院生を指導されましたが、その大部分はオックスフォード大学時代でした。1987年、マサイアス教授はオックスフォード大学からケンブリッジ大学に移られ、ケンブリッジ大学ダウリング・カレッジ学寮長に就任されました。そのため、オックスフォード大学でマサイアス教授から直接ご指導を受けることのできた日本人学生は、皇太子殿下と私ということになりました。しかしながら、マサイアス教授の知的貢献は広く世界に及んでおり、日本の経済史研究者にも多大な影響を与えました。英国に赴いて研究をおこなった多くの日本人研究者が、マサイアス教授のもとを訪れました。マサイアス教授はそうした日本人研究者たちと会うことを楽しみにされました。

マサイアス教授ご自身も、しばしば日本を訪問され、日本の経済史研究者との交友を深められ、皇太子殿下とご家族ぐるみの交流を絶やされることはありませんでした。かつて、マサイアス教授は、大阪で開催されたテムズ川に関する展覧会で開会あいさつをされました。その際、皇太子殿下は、指導教員であるマサイアス教授のお話を聞きに、会場に足を運ばれました。皇太子殿下は、ご公務をお勤めになりながら、ご自分の強い意志で、水運に関する社会経済史研究と世界の水問題に関わる研究を続けて来られました。マサイアス教授はこのことをよくご存じであり、研究をお続けになる皇太子殿下のお姿を、ことのほか喜んでおられ、優れた研究者だと認めておられました。

私は、オックスフォード大学で博士号を取得した後も、マサイアス教授と親しくお付き合いをさせていただきました。マサイアス教授は、学術的なネットワークや社会的なつながりを大事にされており、要請があるといつも快くお引き受けになりました。私が早稲田大学の教授を務めていた1996年、マサイアス教授を日本にご招待しました。マサイアス教授は日本国内の多くの大学で講演をしてくださいました。その後、私は、「日文研」として世界的に知られる京都の国立国際日本文化研究センター（1987年設立）に移り、そこで副所長を務めました。日文研の教授は、国内外の研究者による共同研究を主宰することになっており、私は1998年から2007年の在任中、非マルクス主義的伝統に基づく経済史に関わる共同研究を主宰しました。特に、マサイアス教授は「英国議会資料：英帝国（および英連邦）と日本の比較研究」（British Parliamentary Papers and ‘The British Empire (and the British Commonwealth) and Japan in a Comparative Perspective’）という私の





主催した共同研究を応援してくださいました。この共同研究会には、マサイアス教授、A.J.H.レイサム博士、ルイス・カレン教授（Professor Louis Cullen）が、ゲストスピーカーとして参加してくださいました。特に、カレン教授が共同研究会に参加して下さったのは、マサイアス教授のご紹介によるものでした。本追悼論集は、この日文研での共同研究会に参加していただいた海外の研究者と日本人研究者の寄稿によるものです。

本追悼論集の共編者である A.J. H.レイサム博士（親しみを込めてジョンと呼ばせていただきます）と私の友情は、1978年春にイギリス・ウェールズのスウォンジーで開催された英国経済史学会年次大会にさかのぼります。私は、この学会に参加するために、イギリスに到着した時のことを今でもよく覚えています。出迎えていただいたマサイアス教授は、研究大会の昼食に間に合うように、私を車に乗せ（かなりのスピードで）運転してくださいました。私はマサイアス教授のこの時の運転に深く感謝しなければなりません。無事、素晴らしい昼食をとることができ、私のイギリス料理に対する愛は不動のものとなったからです。私は、この時、ジョンのセッションに参加し、彼の研究を直接知ることができました。彼の研究成果は、1978年、*The International Economy and the Undeveloped World 1865-1914* として出版されました。私は、ジョンの研究に深い感銘を受け、後に、この素晴らしい一冊を日本語に翻訳し、1987年に『アジア・アフリカと国際経済 1865 - 1914年』として日本評論社から出版することができました。

この度のマサイアス先生追悼記念論集には皇太子殿下が二編のご論稿を寄せられました。このことは、私ども編者にとって、この上ない喜びとなりました。ご論稿は、皇太子殿下がかつてまとめられた *The Thames as Highway* の二つの章の要約です。*The Thames as Highway* のご研究は、限られた研究者の間ではすでに知られており、その価値は高く評価されていましたが、オックスフォード大学プリンティンクハウスでの自費出版であったために、一般的には、あまり知られておりませんでした。マサイアス教授は、この研究が出版され、広く知られることを何より願っておられました。今回、皇太子殿下のご研究の一部が学術的に広く共有されることになりました。この喜びは、二人の編者にとっても、何にもまして代えがたいものとなりました。また、このことは、マサイアス教授を心から追悼し、敬意を表する上で、最もふさわしいことだと私は思っております。マサイアス教授は、おそらく天国から微笑みながら、私たちを見守ってくださっていることでしょう。

私ども二人の編者は寄稿して下さった全ての方々に心より感謝いたします。マサイアス教授に様々な形で影響を受けた方々の研究成果が広く世界に知られることを心から望んでいます。

（訳・宮田敏之）

